分科会Ｅ［自由］　文学

報告１　朱沁雪（東京都立大学人文科学研究科博士課程）

テーマ「ゼロ年代中国のファンタジーについて――『今古伝奇　奇幻』を中心に」

1980～90 年代、中国大陸では「ファンタジー」は「小説童話」や「泛達激」などの異なる訳語が存在し、児童文学の下位ジャンルと見なされていた。ゼロ年代に入ると、この状況が一変した。大陸のウェブ小説の中では、児童文学から独立した「奇幻」、「魔幻」、「玄幻」という三つの新たなファンタジーのジャンルが現れ、紙媒体にも拡大した。中国最初の奇幻雑誌『今古伝奇　奇幻』は、中国大陸の現代ファンタジージャンルの模索と作家の育成に大きな役割を果たした。

「奇幻」とは台湾でのファンタジーの一般的な訳語である。ゼロ年代、『ハリー・ポッター』と『指輪物語』の映画版の封切りに伴い、世界中で爆発的なファンタジー・ブームが巻き起こった。台湾では翻訳家である朱学恒が「奇幻」の概念を普及させ、ブームに影響された大陸でも「奇幻」という言葉が使われるようになった。

2003 年 9 月、今古伝奇編集部は『湖北画報　奇幻』（英語名：MAGIC　FANTASY）を創刊し、翌年それを『今古伝奇　奇幻』に改名した（2003－2012，2011 以前月 3 回刊行，それ以降月 2 回刊行，以下『奇幻』と略）。この雑誌は「奇幻」という概念の範囲を巨竜、魔法などの西洋の典型的なファンタジーに限定せず広げていくことを試み、「東方奇幻を打ち立て、ハリー・ポッターに挑戦する」という創刊の趣旨を持つ。2004 年、「新神話主義」という概念が『中国図書商報』紙で各領域の学者に討論された。『奇幻』編集部はアンソロジー『夜話捜神：中国化奇幻作品精選』（2006）で「中国化奇幻」を「新神話主義系列」「都市奇幻系列」「虚擬架空系列」「玄学修真系列」「外来奇幻系列」の五つのカテゴリーに細分化し、そのうち「新神話主義系列」を「中国化奇幻」の中核と見なした。

本発表は主として『奇幻』誌の 2003 年の創刊から 2012 年の廃刊までにおける「奇幻」の推進状況及び各カテゴリーの特徴について探ってみたい。また、雑誌『奇幻』中の「魔幻」と「奇幻」の混用現象を考察し、当時のウェブ小説掲載サイトでの使用状況と比較したい。

報告２　瀬戸宏（摂南大学名誉教授）

テーマ「曹禺『雷雨』魯大海の形象について」

１９３４年発表の曹禺『雷雨』は、曹禺の劇作処女作にして代表作である。１９３５年中国人留学生が東京・一橋講堂で実質的に初演した後、中国で広く上演され、今日では中国現代演劇、中国現代文学を代表する作品となっている。北京人民芸術劇院は、ここ二、三〇年ほぼ毎年『雷雨』を一週間から一〇日程度上演し続けている。『雷雨』の出版は文革終結以後今日まで途切れることなく続いている。伝統的な話劇以外でも、滬劇、黄梅戯、京劇など戯曲(伝統演劇)、実験演劇(ポストドラマ演劇)でも『雷雨』を原作とした舞台が創られている。中国以外の中国語文化圏でも、『雷雨』は上演されている。筆者が別の場所で明らかにしたように、中国語文化圏で一つの時代に『雷雨』がまったく上演されなかったのは、文化

大革命期の中国大陸と戒厳令期の台湾だけである。

『雷雨』の八名の登場人物はいずれも鮮明な個性をもっているが、その中で労働者・ストライキ指導者の魯大海は、他の登場人物と比べてあまり成功していない人物とみなされてきた。近年の『雷雨』上演の中には、中国青年芸術劇院『雷雨』(王暁鷹演出、１９９３年)、安徽省黄梅戯劇院『雷雨』(２００５年)のように、魯大海を削除した舞台もある。

では、『雷雨』の中で魯大海は無意味な人物なのであろうか。

魯大海の原型は、曹禺の回想によれば、１９３１年九一八事変のあと曹禺が保定へ抗日宣伝に出かける時車中で会った鉄道労働者とされている。このほか、曹禺が南開大学在学中に南開新劇団のために脚色したゴールズワージ『争闘』(脚色名『争強』)のスト指導者の影響も指摘されている。

本発表では、これまでの魯大海評を振り返り、魯大海の原型とされる事件、作品などを確認し、『雷雨』中の魯大海の形象を分析し、『雷雨』の中の魯大海の位置を再考察し、それらを通して『雷雨』という作品の意義を改めて考えてみたい。

報告３　楊冠穹（関西外国語大学助教）

テーマ「もう一つの「八〇後」:「詩界 80 后」」

同済大学文化批評研究所准教授である王暁漁（1978～）は 2004 年 12 月、1980 年代生まれの中国の若手作家たちを総称して「八〇後」（パーリンホウ、中国語表記「80 后」）作家群と呼ぶことは「命名の暴力」であると、初めて問題提起した。翌 2005 年 3 月、文学評論家の白燁（1952～）は、文学における「八〇後」の呼称は「必ずしも正確ではなく、80 年代生まれの作家たちも不満を持っている」呼び方だが、「未だにより適切な名称が考案されていない」と述べている。

この問題に関して、発表者はこれまでに発表した論文において、初期の「新概念作文大賽」（以下、「新概念」）をきっかけにデビューした、1980 年代生まれの作家群が作品を発表していくことを、文学における「八〇後」の登場と結び付けた。その理由は、韓寒（1982～）や郭敬明（1983～）らにとって「新概念」での受賞は非常に重要な出来事であり、彼らの受賞後の長編デビューと出版活動により、「八〇後」世代の作家が社会に認識されるようになったのである。しかし、ここでは 1980 年代生まれの作家すべてはなく、韓寒らを中心とする、「新概念」から輩出した作家群のみが視野に入れられているのである。

実は、王暁漁によって「命名の暴力」を指摘される以前に、文学における「八〇後」の呼び名はすでに詩界の中で注目されていた。2002 年 6 月、共産党瀋陽市委員会宣伝部の管轄の下、瀋陽市文学芸術界聯合会発行の月刊文芸誌『詩潮』が、「校园詩抄――80 后詩作品専輯」という特集を掲載し、初めて「80 后」という呼称を使った主流文芸誌となった。文学界における「80 后」の名付けは、少なくともその初期において、小説を中心に文芸活動を行う「新概念」作家群よりも、むしろ 1980 年代生まれの詩人群の活躍によって発展した可能性がある。本発表では、小説を主流とされた「新概念」とは別で、もう一つの「八〇後」

である「詩界 80 后」に注目し、彼らの初期の創作状況や文学研究界の反応を考察したい。